哲学的思考を育てる
―「言葉の意味はだれが決める？（永井均）」の学習課題

松本　修

国語科の教材には、哲学的随想というべきものがあり、古くは唐木順三、大森荘蔵などの文章が良く使われ、今では、土屋賢二や永井均などが使われている。文章自体は読みやすくなり、内容も一見軽くなってはいるが、従来こうした教材はどこまでも読みの学習材であり、「読んで理解する」ものであった。しかし、哲学的随想は、かつて森有正の「霧の朝」をそう論じたように（松本修 1992)、そこにある〈思考する状態の美学〉というものに魅力があり、思考・思索の結果そのものに魅力があるわけではない。このことは、教材論としては意識されていない傾きがある。ここでは、中学校教材となっている永井均（1997）の『子どものための哲学対話』を材料に、哲学的思考そのものを育てる学習課題について提案する。

『こどものための哲学対話』は、ペネトレという猫と中学生の「僕」との対話の形で、比較的易しい言葉遣いで書かれた本であり、そのようなスタイルを通じて、日常的な場で哲学的な内省を促してくれるような魅力を持った文章となっている。学校図書の中学校国語教科書『中学校国語２』では、本の冒頭と二つの節をつなげて、「言葉の意味はだれが決める」というタイトルで教材化している。文体的特徴を生かしつつ、やや堅めの概念をくだき、自分のものとしながら学習活動を進めれば、自分自身の頭で考え、自分自身の経験と思考を大切にしながらすべてのものごとを考えていこうとする素朴な哲学的姿勢を身につけさせるための学習材として用いることが可能である。教材の骨子は次のようになっている。

導入の部分と「僕」と「ペネトレ」との対話で構成された二つの部分に大きく分けられる。この二つの部分はアステリスク（＊）三つをおくことで分けられている。出典の『子どものための哲学対話』では、導入部分が全体の「序章」の部分であり、アステリスクを挟んだ展開部分は、第１章 14「言葉の意味はだれが決める？（１)」と第１章 15「言葉の意味はだれが決める？（２)」をつないだ部分である。

導入部分

ここで、ペネトレと呼ばれる猫の言葉がいきなり紹介され、その不思議な物言いで読者を惹きつけたあと、「ペネトレ」が紹介される。「僕」が中学一年生らしいこと、三年前から「ペネトレ」が住み着くようになったこと、そのペネトレが人間の言葉を話し、しかも常識や固定観念を覆すようなことを話しかけてくることが説明される。そしてアステリスクを挟んで次の続く部分が、「僕」と「ペネトレ」の会話であることが示される。小学校五年生の時から住み着いた対話の相手としての猫というところから、自我の目覚めとともに、内面に住み着くもう一人の自分（対自我）としての側面を持つことが示唆されている。

ペネトレは、フランス語の　pénétrer　（動詞・洞察する。見抜く。探る。）　あるいは pénétré（形容詞・悟った。看破した。洞察した。）に由来すると思われる。哲学的思考を貫く（動詞の場合、原義は「貫く」「しみ込む」）猫の性格設定をふまえた名前である。ちなみに永井均の著書には『翔太と猫のインサイトの夏休み』(1995)、『倫理とは何か―猫のアインジヒトの挑戦』(2003) があり、insight　は英語で「洞察」を、einsichit　もドイツ語でやはり「洞察」を意味する。ちなみに猫は夏目漱石の『吾輩は猫である』もあるように、何かしら哲学的思考に結びつく性格が感じられるものなのであろう。

展開部分の前半

ここで、「気が置けない」という言葉の意味を「僕」が取り違えていたこと、そういう取り違えをする人が若い人に多いことをめぐって対話が交わされる。言葉の正しい意味とは、それが一種の約束・制度である以上、多数派が決定することになるが、歴史的観点を入れると、多数派は過去から現在までの通時的な背景を持つから、そうした歴史を良く知る権威者というものがいて、それが言葉の意味を決定する優先権を持っているという面もある。それは、言葉だけではなく、慣習なども含めた文化・政治など多くの「制度」に当てはまることであることが語られている。

展開部分の後半

「間違った意味の方が圧倒的多数派になれば、それが正しい意味になるのでは？」という僕の疑問に始まって、ペネトレは「情けは人のためならず。」という言葉を例に、逆の意味が通用するようになるという過程を具体化するとともに、文脈の必然性、現実的な要請があって、それなりの根拠を持って意味が変わるということが説明される。少数派が多数派に入れ替わるための条件を提示し、新しい意味が制度として定着するには、それが必然性を持って受け入れられる土壌があることを述べている。

この教材は、親しみやすい形で〈思考する状態の美学〉を提供してくれるものであり、単なる慣用句の意味の学習などに用いられるべきものではない。学習目標は「言葉の意味を支える制度や権威の働き方について理解する。」というような形になるべきであり、普段は無意識に自動化して使っている言葉の意味というものを改めて考え直し、言葉の意味とその理解、互いの了解を可能にしている背景について洞察するための教材として用いるべきであろう。

教材の最初の部分（本の冒頭部分）は、次のような書き出しとなっている。

人間は遊ぶために生きている。
学校なんか行かなくたっていい。
うそをついてもいい。
クジラは魚だ。
地球は丸くない。
……。
ペネトレはこんなことを言うんだけど、どう思う？

ペネトレの言葉は、「話す内容も変わっている。普通の人が言うようなことは絶対に言

わない。」「意見の内容も普通の人とは全然違うんだよ。」とされているような内容を持っている。それは「最初はちょっとびっくりするけど、よく考えてみると、ひょっとしたらペネトレの考えの方が正しいんじゃないかって思えてくる。」とあるように、常識とは正反対のことを言っているが、それなりに根拠を与えることができるような考え方である。冒頭、それぞれに、それなりの根拠を付けることが可能であろう。いずれも個人の主体的な経験とそれに基づく判断を重視したものとなっており、直面する事象・出来事に対して、自らの頭で考えることを要求するものとなっている。それはこの文章の本質的な主張でもある。たとえば、「人間は遊ぶために生きている。」でも、「働くため。」「自己実現を図るため。」というような考えを、「なぜ働くのか。」「何のために自己実現を図るのか。」という新たな問いにさらし、「結局は遊ぶためだ。」という形に結びつける論理を想定することができるわけである。一種の屁理屈であるが、丸い地球などほとんどの人間が肉眼で見たこともないのに、また学問的な説明を十分理解できているわけでもないのに、「常識」として「地球は丸い」ことを受け入れているという滑稽を突いている。このような何でも疑ってみるという素朴な哲学的姿勢をこの時期の中学生に持たせることにこそ、この教材の意義があると考える。

実はここにある問いは、この本の節のタイトルのいくつかに対応しており、この本はこうした類の４０の問いに対応した対話の形で書かれている。教材文では、二つの節しか用いていないから、そこでの対話の展開をたよりに、ペネトレならどう言うか？　という発想で、それぞれの問いに対する答を考えさせることが可能である。これを学習課題として、哲学的思考を育てる学習を組むことができる。

「クジラは魚だ。」を例にとって、考えてみよう。

解答例として、「クジラは肺呼吸するし子どもも卵で生むのではなくて母乳で育てるから哺乳類とされているけど、肝心な見た目や生活環境が魚と同じで、魚と同じように暮らしているから、本当は魚なんだ。」というような説明を考えることができる。

『子どものための哲学対話』３章６「クジラは魚である！」には次のように書かれている。

ペネトレ：クジラは魚のように見えるけど、ほんとうは哺乳類で、魚じゃないってはなし、聞いたことある？

ぼく：もちろんあるよ。クジラは、魚のようにえらじゃなくて肺で呼吸するし、魚のように卵の形で子どもを産むんじゃなくて、クジラの形で産むんだよ。それで、産まれてきた子どもは水中で母乳を飲んで育つんだ。だから、クジラは魚のように見えるけど、ほんとうは哺乳類で、魚類じゃないんだよね？

ペネトレ：でも、その逆のことも言えるんじゃないかな？

ぼく：逆？

ペネトレ：つまり、そういう点ではクジラはどうしても哺乳類のように思えちゃうけど、肝心な外形や生活環境が魚みたいだから、ほんとうは魚なんだって言ったら？

（中略）

ペネトレ：でも、分類のしかたによってはクジラは魚でもあることは、たしかなことだ

よ。外形や生活環境よりも内部のしくみを重視するって前提があってはじめて、クジラはほんとうは魚じゃないなんて言えるんだ。じゃあ、なぜ内部のしくみのほうを重視するのかっていえば、それはぼくらがそういう文化の中に生きているから、としかいいようがないんだよ。

冒頭の問いには他に次のような節が対応している。

「人間は遊ぶために生きている。」→第１章１「人間はなんのために生きているのか？（１）」
第１章２「人間はなんのために生きているのか？（２）」。

「学校なんか行かなくたっていい。」→第１章 10「学校には行かなくてはいけないか？」

「うそをついてもい。」→第１章９「うそはついてもいいけど、約束をやぶってはいけない？」

「地球は丸くない」→第３章８「地球は丸くない！」

それぞれ、論の骨子は次のようなものである。

・「人間は遊ぶために生きている。」

人間は結局は遊ぶために生きている。仕事をしてお金をかせぐのも遊ぶためだけれど、仕事そのものが遊びになって手段が目的になってしまっている。したいことをしていることを遊びというとしたら、人間は遊ぶために生きている。

・「学校なんか行かなくていい。」

学校に行くべきだというのは世の中の公式の答というものの一つで、世の中が成り立つために必要な公式の答は受け入れなくては生きていけないから、受け入れるなら行かなければいけないが、どうしてもなじめないなら、無理をしてまでそれに合わせる必要はないから、学校なんか行かなくていい。

・「うそをついてもいい。」

普通はうそをついてはいけないという前提のもとで暮らしているが、「うそをつかない」という約束をしていなければうそをつくこと自体はいけないことではない。約束は守らないと他の人にめいわくをかけるが、うそが直接迷惑をかけることにならなければ、うそはついてもいい。

・「地球は丸くない！」

人間は地面の上にあるスイカとかボールのようなものを丸いと言っている。地球が丸いと考えたとたんに巨大なボールのようだと考えてしまう。下の方にいる人が落ちないのは引力があるあるからだというのは無理に考えているので、上下のある世界は平らな地面を規準にしているのだから、地球は平らな地面であり、丸くないのだ。

（この前提には、日常の感覚として地面は平らであり、上下の感覚が支配していること、普通肉眼では丸い地球などというものは見たことがないという事実がある。）

学習者の言葉の力のレベルによって、答は多様なものになるだろう。しかし、素朴な言葉でも、こうした常識を疑い、自分の言葉と経験からものごとを考え直すという「哲学ごっこ」の方法を身につけ、哲学的思考を育てていくことが、結局は言葉の力をつけることにもなっていくのではないだろうか。国語科では、演習教材とすべきものが読みの教材に転じてしまうということがしばしばあるが、哲学的随想もそういうものだったのではない

かと思われる。わたし自身もかつて形式論理学などを教材化したことはあるが、課題に基づいて思考そのものを成立させるという試みはしていなかった。こうした学習は、書く力をのばしたり、それぞれの考えを持ち寄って話し合うことで聞く・話す力をのばしたりする上でも意味があることと考える。

文献

永井均　1995　『翔太と猫のインサイトの夏休み－哲学的諸問題へのいざない』 ナカニシヤ出版

永井均・内田かずひろ　1998 『子どものための哲学対話－人間は遊ぶために生きている』講談社

内田かずひろは、『ロダンのココロ』（第１巻～第５巻　1997-2004 朝日新聞社　朝日新聞夕刊連載）などで知られる漫画家。本書では挿絵を担当。第３章１「ニンゲンのココロ」では、「ロダンのココロ」が引用された上で論が展開されている。

松本修　1992　「思考する状態の美学－森有正「霧の朝」の教材研究－」『Groupe Bricolage 紀要』10

（まつもと　おさむ　上越教育大学学習臨床講座）